



校長室だより

第 5 6 号
(通算第109号)
令和5年3月10日(金)
大崎市立沼部小学校
校長 吉田 浩之

あの日を忘れない④

～震災から3年 野蒜編～

震災から3年目、宮城県図書館勤務から東松島市立野蒜小学校勤務を命じられました。野蒜小学校は校舎の1階天井部分まで浸水したことで、校舎が使用不能となりました。海岸から1.2km離れていたのですが、ここまで、波が来たということに驚きしかありませんでした。東松島市鳴瀬庁舎の大会議室等を使って学校が再開し、その後、民間の高齢者施設の一角を借りての仮設校舎となりました。その敷地は東松島市鳴瀬体育館のそばで、市の方針により、体育館を校舎の一部として使わせてもらっていました。野蒜小学校では、9名の児童が津波の犠牲となり、校舎も使えなくなったことから、仮設校舎の敷地に10本の鎮魂の桜が植えられていました。赴任した日、その桜のつぼみがかなり膨らんでおり、複雑な思いで仮設校舎の玄関に入りました。

私は、海水浴や、潮干狩りでよく野蒜方面に行っていました。野蒜小学校に勤務することになり、通勤経路等を確認しながら、被災した校舎に行ってみました。にぎやかだった学校の周辺は、跡形もなくなっていました。「駅のそばに民宿があったなあ。このあたりにあった食堂で食事したことがあったなあ」などと思い返していると涙が止まりませんでした。自然災害の恐ろしさを改めて感じました。

私は津波を経験していません。しかも学校現場とは違った場所に勤務していたので、被災した学校で自分は何ができるのだろうと、不安しかありませんでした。それでも保護者や地域の皆さんとお話できる機会が増え、少しずつ不安は消えて閉校に向かって進むことができました。そこで聞いた話から、当時の様子をお知らせします。

- 津波は、10cm, 20cm, 30cmと体育館に入ったのち、一気に2.9mまでの高さになった。避難者は、緞帳や浮いているものにつかまり、さらには、2階のギャラリーに逃げた人たちが、卒業式の紅白幕のロープやカーテンを下げて救助にあたった。私も助けられ、その後、声をかけ、救助を行った。特に若い教職員は、まだ水が引かない中、下に降り、救助にあたった。
- 体育館の裏が山であり、体育館へ大きながれきが入ってこなかったため、津波が渦を巻き、その後徐々に引いていったのでゆっくり救助することができた。
- 車で流された人、破壊された家の屋根に閉じ込められた人たちも、体育館から外に出て救助を行った。

ほかにも避難所での様子や、仮設住宅に移ってからのことなど、いろいろな話を聞きました。共通していることは、日頃から何かしらの備えをしておくべきだということです。

現在、野蒜小学校は閉校し、宮戸小学校と統合し、宮野森小学校となっています。校舎も高台に新築されました。もちろん、私が過ごした仮設校舎はもうありません。